

コラム

鳥インフルエンザに関わる情報の問題

加藤宏光

昨年に突然発生した、強毒タイプ
の鳥インフルエンザ(HPAI)に始
まり、本年六月二十六日に公示され
た弱毒タイプのそれ(LPAI)にも
等しくそれぞれに関する情報が飛び
交っている。

著者が、昨年から今年にかけて
種々の一般マスコミの取材を受けた
際実感したのは、担当する記者が、
まったくの素人であるにも関わら
ず、極めて短期間に養鶏事情を含め
た事例について、AIウイルスとそ
のワクチン問題などかなりの専門知
識を得ており、かつよく理解してい
ることである。

業界の専門メディアであれば、業
界常識の存在を前提としているた
め、現状を分析することが容易であ
ることも頷けるが、例えば一週間前
まで殺人事件を取材していた記者

が、AI問題を取材するために農水
省の記者クラブに詰め、デリケート
な問題を取材するのである。こうい
った記者は、数カ月の期間を過ぎる
と、再び殺人事件担当へと戻る。
もちろん、学術や文化といった分
野を継続的に担当する専門の記者も
いる。しかし、こうした人々も、鶏
あるいはAIといった限定された課
題に長く携わるわけではないよう
だ。こうした普段養鶏とは関連のな
い人々が、特殊な分野に対してかな
り深く広い情報を得て、分析する能
力を持っていることは、著者が専門
家として長年業界に携わって少しず
つ得てきた経験の歴史と対比して、
改めて敬意を表するものである。

毎日新聞コラムを巡って

一連のLPAI事例では、ワクチ

ンを使用したいと切望する採卵養鶏
業界とあくまでその必要はないとす
る行政の対立は、一般人の目を引く
恰好の材料となった。

毎日新聞の「記者の目」なるコラ
ムに、小島記者が業界サイドの観点
から【予防的ワクチンの有用性・必
然性】を説いた。これが業界に偏り
すぎているとのことで、行政からの
響きをかっさと聞いている。著者
が、毎日新聞の記者からのインタビ
ューを受けたのは、この記事からさ
ほど経たない頃であった。

延べ六時間に及ぶ取材において、
昨年一月に七十九年ぶりに発生した
HPAIの顛末からLPAIの持つ
弱毒(今回は非病原性)であるが故
の、HPより大きな危険性とリスク、
行政が今回下した指針のサイエンス
からみた矛盾と、それに帰せられる
リスク(業界システムや鶏糞処理の
現場作業を含む、キャリアの排泄す
るウイルスが二次感染を引き起こす
可能性)、それぞれの立場において、
各位が必死で防疫に努力しているに
も関わらず発生してしまふ、すれ違
いの悲劇等々を説明した。

その中には、防疫を目的としたワ
クチネーションを実施するなら、今

こそそのときであること、そのため
に備蓄したワクチンを、いま使わず
いつ使うのか、ワクチン対策を打た
ずにウィンドレス鶏舎のAI陽性鶏
を観察処分として、その結果、二次
感染が発現してしまったときに行政
はどのような責任をとれるのか、と
いうこと、予防的ワクチンの使用に
関する理想と現実までの距離・ハー
ドルの実態などを外回の情報を交え
て縷々説明した。

また、著者の力説するところが、
一般紙に異なつた方向で開示される
ことを恐れ、記事掲載の前に必ず連
絡し、著者の了解をとること、の強
調を忘れなかった。

にもかかわらず、十月十六日に著
者への確認をとることなく、突然同
コラムに掲載された記事に、著者の
コメントとして「ワクチン論議は予
防と拡大防止を厳格に区別する必要
があり、予防的接種は危険すぎる」
という言葉を用いた旨が記載され
た。著者のコメントは、この二行で
あるが、全体の文脈では、小島記者
の主張に真っ向から反対する意見が
主張され、一見すると著者が「AI
ワクチンが危険である故に反対」し
ているかのような印象を受ける。

直ちに強く抗議した結果、毎日新聞の記事として対応することはできないが、投書として著者の意見を掲載し公平を期したい、との言葉を得た。そこで記述したのが枠内の原稿である。果たして、この内容がどの程度反映されるかが、毎日新聞の公器としての価値を判断する好材となる。

こうした取材に出会うとき、実感することがある。記者の頭の中には、



10月6日付の記者の目で、私の意見として、「ワクチン論議は予防と拡大防止を厳格に区別する必要がある、予防的接種は危険すぎる」と引用された。望月記者の「鳥インフルエンザ(以下A I)・ワクチン(以下V)解禁への反論」という記述の中である。先に小島記者が述べたA Iの予防的V肯定的意見に対応するものであろう。同じ報道機関所属ながら、相対する意見を述べ得ることは、自由な発言が確保されている社風を裏付けるものであろうが、読者を混乱させる。また、引用意見は前後の文意で読者を誘導する効果を持つ。

望月記者の論調が私の本意と反する感を否めないのはこの論法に帰する故である。公平に見て、両意見とも姿勢に偏りが強い。

予防または浄化目的として、A I Vが論ぜられるが、一般読者に両者の区別が容易だろうか。報道は、読者の誤解を招かぬよう十分な情報蓄積と理解を基になされねばならぬ。

茨城A Iへの行政対応は、初発の水海道での抗体陽性全例殺処分を鑑みて、論理矛盾を内在する。私は臨床鶏病獣医師として、40年余現場を見て生きてきた。その経験を基にして次のように考える。

今回の現状とリスクの分析をする場に現場を熟知するメンバーが一切関与しない(できない)で机上の理論で全ての処理がなされている。それ故の論理矛盾が、種々の不満や問題の一因となっている。

生産サイドと行政姿勢の対立は、立場の相違を加味すれば理解できるが、何も生み出さない。冷静に現場事情を考慮できるメンバーを加えて熟慮された対応こそ、鳥と人の安全を両立させるに必要な条件ではないだろうか。

取材に際してすでに一般の読者にアピールしたいトピックスやストーリーが蠢いている、ということである。それが未だ形をなさなくとも…。それが形をなさないからこそ、自分の望む形を創り出すために取材をする。そして、種々の情報のパーツをつなぎ合わせることで、どのようにも情報は加工できる。

情報の質は、加工する人間の情報分析力や意図によって上がりもすれば、下がりもする。専門業界であれば、情報を得る側に、定以上の業界常識がある(あるはずなのに、ないときは、問題を醸す)。しかし、一般人にはこうした業界常識は期待できない。それ故に、情報提供者の責任は重大といえる。

著者は、一九八三年にアメリカ、ペンシルバニア州に端を発したHP A Iに際して、その実態を訪米して調べた。それ以来、A Iについての情報収集に足を伸ばした国々は、アメリカ、韓国、中国、メキシコ、英国およびイタリアで、それぞれの国々でオーソリテイの力説する対策と現場における実効を対比することによって、A Iの持つ問題を著者なりに実感しようと努めてきた。それ

は、情報の受け売りで予想外の誤謬を来たさないための、著者なりの姿勢によるものである。

一般マスコミの取材は、とかく興味本位でなされる。しかし、一般人がそれによって情報を得て、状況判断するとき、取材し、記事や番組をつくる人の意図に影響されるのは必然と言える。だからこそ、取材は綿密になされねばならないし、報道の公平性をいかに確保するかの手段も確立されねばならない。

こうした重大な責任を負うマスコミが、その責任を自覚するときには、集める情報の十分な量や質は当然ながら、その公平さを十分に評価できるだけの研鑽を積むことが要求される。なにしろ、一般読者はタマゴに限らず、すべての製品の購買者でもあるのだから。

『言う』は易く『行なう』は難い。この原則をすべてに求めることには無理があることは十分に理解される。とすれば、業界サイドから一般人への情報提供の方法がもっと充実されねばならないのではないだろうか。

(株)ピーピーキューシー研究所代表取締役社長／農学博士・獣医師)